

人口問題研究所

所定書目

昭和二十一年十月一日

社會主義的人口理論の概観

カウツキー著『自然と社會に於ける増殖と發展』より

著者 人口問題研究所

分節 目次

一 序言

二 一般生物界に於ける増殖法則

三 人間社會に於ける増殖過程の特性

四 生活空間の拡大過程と人口増加速度の推移に關する史的展望

五 近代資本主義社會に於ける人口問題

六 將來社會主義社會に於ける人口問題

七 結語

社會主義には人口論をいといふ通例の批難は人口問題を凡々の社會經濟問題から独立し、之を制約するところの超歴史的な基本問題と考へる立場を前提としてのみ批難で、

人口問題の社會經濟的制約關係を強調し人口法則なるものの歴史社會的特性を力説する

マルクス主義的、或は科學的社會主義にさういふ意味での抽象的な人口論がないのは寧ろ

当然といはしむるべきであらう。が人口問題は本來多分に生物學的内容を含んであり、人口法則を

もつもの歴史社會的特性を力説する尺にも一應はさういふ生物學的自然の世界にも觀察の

視野をひろげ、問題の本質が人間社會の歴史と共に新しい推論を採つた所以の理由をも

説明するところを付け加へるべきであらう。そして人口問題にかゝる全面的な取り扱ひが欠けて

あるといふ意味ではさきの批難も派公子しむ理由が幾いわけではない。資本主義社會に於

ける所謂過剰人口成立の必然性や資本主義の法則から推論的に分析してマルクスの態度は

問題の科學的社會主義的取り扱いの必要を承して遺憾なくもつたのはあるが、問題の全範圍の

史的唯物論的發展は取り扱ひられず、問題であつたといつてもよい。人間自身の生産及び

再生産をも賤貨のそれと並んで歴史發展の基本動力とみることを唯物史觀の課題として提

實際に具体化し得るものであるか如何かについては史的唯物論の立場からして多少の提  
 議がないわけではな。そしてエンゲルスが科學の無限の進歩の社會主義的社會に於ける  
 人口收斂力の無制限を拡大可能性を力説するとき、この極端に樂觀主義的を態度は社會主  
 義的信條の告白として勿論正當でもあり特に共産的なるものではあるが、彼自身の提議せ  
 る史的唯物論の課題は極端に一元的進行的を解を與へられたいはさうを得ず。その極  
 端に樂觀主義的、非懷疑的の態度が人間の存在及び并生關係を捨棄し去れりが故に結果  
 せるものであるが如何かは別として、それが人口問題の全面的な再珍味への理論的要望  
 を一掃悉くするものであることは公認する。人口の發展を經濟の發展と並んで立  
 つの産業發展の一動力として見るは存くとも、小くとも社會經濟的發展の規制すべき最も基本  
 的なる事として之を全面的に取り上げることは社會主義の理論的必然系として取り残さ  
 ずとも重要な課題として取り上げたいはさうである。かゝる理論的要望に答へる唯一の  
 文獻として我々はカウツキーの晩年の論著自然と社會に於ける増殖と發展（一九二二年）を舉  
 げることができよう。その所説の凡々が果してマルクス主義社會主義者の完全に承服すべ  
 きものであるか如何かは問題の性質上の論争の疑ひもあり、またその人口論にマルクス主  
 義的要素を取り入れた修正派の立場とは無關係であるが併しその論旨の一部には修正主義

的傾向と一致するところも少くない。がそれだけ穩當かつ全面的なる社會主義的人口理論として参照すべき古典的價值をもつともいへよう。社會主義の人口理論を権威するに最も恰好の文献として本書に其の紹介する所以である。

吾は本書の成立にはカウツキーの學問的生涯を貫く迂回曲折の事情があり、それを知つて置くことは本書述の料を整理する上にも無意味ではない。その青年時代、未だマルクス主義的社會主義の確信に及ばぬ以前のカウツキーは深くダーウィンの影響下にあり、ダーウィズムと社會主義とを綜合することとまで研究の目的としておる。一八七五年發表の「頭腦勞動者の立場より見たる社會問題」及び「ダーウィンと社會主義」(共にライプティヒブルクス・タール誌)の二論文はこの青年時代の野心的試みであるが、特にマルクス人口論についてはなほ通り一遍の社會主義的批評を行つてゐるに過ぎない。ところが彼がダーウィズムに深入りすればするほど人口問題に対する社會主義的態度に不満を感じようになり、その更特に當時の社會勞動問題に於ける党外の指導的論客アルベルト・ランゲの影響を受けること少くなくした。社會主義に人口論なしと論難したランゲは人口問題こそすべて社會問題の最初の出発点であり最後の目標であることを強調したものであるが、カウツキーも亦マルクス人口論の中にダーウィズムの根本前提を、一般生物學に於ける過剩増

益々の深く關心するに到つた。一八七八年、翌年出版禁を存するの論者「人口増加の社會の進歩に及ぼす影響」は、この立場で著され、青年カウツキの代表的人口論作である。その後カウツキはマルクス及びエンゲルスとの個人的接觸を転機とし、典型的なマルクス主義的社會主義の立場へ立つたに到つた。正續マルクス主義者として「ノイエ・ツァイト」誌を創刊した。一八八二年のことである。が正續マルクス主義の理論者としてカウツキは、人口問題に觸れなかつた。が晩年に至るにつれて、その舊作人口論が當時のマルクス主義再燃を背景としてロシアに於いて懸約せられ、之に原着者の序文をのせよことを欲せらるゝに及んで、その舊作が社會主義的人口理論として諒解されることを怖れて、新しく正續マルクス主義の立場から執筆し、之に到つた新著が即ちこの「自然と社會に於ける増殖と發展」の一巻である。いはば彼の生涯を貫く人口問題研究は幾度遭を経るに最後的の集成をみればここに存する。

右の如き不完成の筆蹟がその内容論旨にも舊著と対照的なる力点を與へるに到つたことは当然で、彼自身を序文の中で青年時代の舊作と若氣のあやまるところへ引つておる。一般に物界に適用され、マルクス主義がオーストリアで人とは全く別物であることと互に批評し、しるものとなす、兩者の対照的相違を最もよく示すものがあつた。これは「社會主義と人口

問題の全面的論述が欠けておるといふ當ての考へは彼自身もいふ通り全く放棄されたわけでは行ない。正統派マルクス主義の立場を堅持しながらもその問題視野をひろく生物學的側面にまで拡大しようとする努力はそのあらはれかゝ一例であり、新マルクス主義的の産兒制限方策を未來の社會主義的社會に於いては新しい諸條件と目的との下で考慮してあるところは社會主義の立場がらする全問題の綜合的根柢を求めようといふ。社會主義の立場がらする人口問題の史も穩健妥當にして全面的な論述として取て本書の技術的内容分都を紹介する所以である。但し以下論述の全節順序等はすべて紹介者を適宜に行へるものである。

ニ 一般生物界に於ける増殖法則

マルサスの人口論はその根本命題を一般生物界に共通な根本事實から導いてゐる。即ち凡ての生物はその生活資料を越えて増殖しようとする不断の傾向を有するといふ主張である。従つてまた増殖を規制するものはこの生活資料の不足であるといふ主張である。カウツキのマルクス批評は先づこの事實の眞偽如何の検証から初まる。ダーウィニズムの自然科学的權威は一般にマルサス主義に極めて有利なように考へられぬ。ダーウィン自身がマルサスの名を擧げ、自説を以つてマルサスの理論を一般生物界に拡張したものと誇つてゐる。

ののは固知のことである。がカウツキーは先づこの通俗的な先入見に分析のメスを入  
 る。彼によれば一般生物界に適用されたマルサス主義とダーウニズムとは根本的に相違し  
 たものである。蓋し無際限の増殖傾向からダーウニズムの導き出すものは生物種の不断の進化  
 の盡滅であるが、反之、マルサスの結論するものはプロレタリアの窮乏と墮落とである。  
 従つてダーウニズムは同種の個体間の競争即ち適者生存とくのみならず種全体が他の生物種  
 に対すも乃至は一般的を危険に對する競争を行ふ事實とくわけであるが、反之マルサス  
 は同種個体間の食糧の爲の競争と之に伴ふ弱体化と退化としか説かない。即ちマルサス  
 就は自然界の事實には當まはまりぬわけ、従つて無際限の増殖傾向を規制するものは食  
 糧の不足であるといふ主張もこゝで否定せられぬことになる。といふのは生物種の増殖力  
 は種の生命に對する危険、即ち他の生物種に滅せられる危険乃至は更に一般的を危険に對  
 すももつて、食糧關係は決定的な要因ではないといふ意味である。カウツキーがこゝで認  
 察の對象を抽象的な個体ではなく種全体に、更に進んでは種相互間の全体的環境に置く  
 べきことを強調し、一個の個体又は一組の雌雄を抽象してその増殖傾向を論ずる通俗的  
 科學的態度の方法論的欠陥を經濟學に於ける價值法則を例にして指摘してあるのは特に通  
 俗的な鼠算的人口論に對して意所を突いたものといへよう。

全体の聯繫から反直するとすると、それは知らず知らずのうちに、増殖力の努力下に眺められる。

この生物は同時に他の生物に対しては全部的に、乃至は少くとも部分的に營養供給者の意

味をもつものであるけれども、他なる食糧需要増大の傾向は同時に他なる食糧供給

の傾向でもあるわけだ、若し假りに生物界に二見制度をともなうが実行されたとしたら、生物

は直ちに食糧不足に撞着することになること、カウツキはハツクである。これは勿論一時的

の逆説的表現であるが、そのいはんとするところは、生物は何よりも先づ第一に他の生物の

食糧を必要とする、その他天災地変等による一般的危険のためには、その生命を破滅せしめ

る危険に當面しては、かゝる破滅的傾向に対する対抗手段として、その第一には諸種の

抗的諸特性の発達をみ特に高い妊力をも有するに到るものであるといふこと、即ちそ

の増殖力は決して食糧の限界を不斷に超えようとするものではなからぬといふことである。尤

も食糧不足による生物死滅の事實もあるが、それらは多く局部的例外的現象で、且つその

原因は増殖力のためよりも寧ろ環境の急変によるものであること、カウツキは指摘して

ある。要之、生物的自然の一般的法則としてはマルサスの人口法則は完全に無意味である

といふのがカウツキの批評の骨子である。

とのない猛獣もあふ。が之らの場合にもカウツキーは過入増殖の危憂がないことを指摘し、生物の増殖力がその個体と種とを保存する力と之を破壊する力との間の均衡を保つよ  
うに保持されておることを説き、さういふ意味での自然に於ける均衡 *der Gleichgewichts*  
*in der Natur* の存在を力説強調する。

人間を除く一般生物界には、そして人間が歴史的に干渉せざる限りには、種の生  
命の保存と破壊との力は全く均衡を得ておるが自然法則的な原則で、増殖力も亦生  
命保存の爲の最も主要な一つの力としてか、も均衡法則の下に立つておるといふ石り主張  
豆カウツキーはそのマルクス主義的唯物論の立場から立論しておる。生物現象はすべて  
外的諸条件を基合として成立するものでなければならぬ。従つてこの地球に於ける最初の  
原生動物発生の際情を考へておると、それは気温、濕気等一聯の諸条件の成立に伴ふものと  
考へべきで、従つてそれは諸處古々に同時に發生せるものに相違なく、従つて又その発生  
と同時にその營養空間を実合に充足して了ふものと考へざるを得ない。また假りに這歩を  
譲つて地上の最初の生物的生命は他の天体より飛来して来たものとしても原生動物の巨大増  
蕃殖力は直ちに地上の營養空間を充足して了つたものと考へざるを得ぬ。そこでかくも原  
生物のみの世界によつては唯その死滅が同種の他の個体に對する營養供給に資するわけだ、

その生命破壊の量は營養供給の量に一致し、この均衡が増殖力を決定することになる。

事實アメリカの分裂繁殖は完全にその營養供給に依存し相應してゐるといつてよい。生物の進化發展と共に、關係はいよいよ複雑となり、且つ右の生命破壊の方と營養の供給と増殖との三つの要素は夫々獨立化する傾向を生じ、従つて又その間に種々の過不足が生ずるけれども、併し生物界全体として右の均衡關係は永續的に妨げられることを誌さず、個々の生物種に對して飽くまでその原則的法則性を貫徹するものでなければならぬ。即ち妊孕力が過少な場合は種の絶滅を結果するが、過入の場合にはかゝる種を食料とする他の種生物が増入することによつて均衡は回復せられる。又かゝる敵對關係に立つ他の生物のない場合には過入妊孕力は却つてその種の自滅を結果するわけだ。結局は均衡關係に立つものだけが生存權を維持することになるといふのがカウツキの意見である。従つて産して進化の進んだ且つ強かな動物ほど實際に増殖力は低い。例へば象は三ヶ月に及ぶ懷妊期間と二乃至三年の生長期をもつてゐる如くて、そこに自然的均衡關係は維持されておるといふのである。かゝる均衡貫徹の生物學的説明としてカウツキは個体の進化と個體保存の爲の方の増大が妊孕力の低下を結果するといふ入ベニサリの説を援用し、種に體量の増大に伴ふ運動エネルギーの加速度的増大が妊孕力の低下を伴はざるを得ないことを

ども種々議論してゐるが、スパンサーの説には専門的に異論もあり、又自然的均衡論にとつてその生理學的説明の如何は本質的な問題ではないともいへよう。唯物論の立場からいへば、つて特に善悪し得る説明はカウツキーが在胎中の相違をその生活方法の差異より論じてゐる説まで、何れも野生の牛馬は子供を危険から除却する場所がないために生かされるとして、群居行動する必要があり、その為めに懐妊期間が長くなり、子供数は少くならざるを得ないといふべきやうな懸念である。また食を造る習性をもちた魚の産卵数が一般に産卵数の極めて多い魚類中にあつて特に多いことなどもその番割の一つとなる。要之、生物界に於つて適者のみがその種の生命を維持し得るのであるが、謂ふところの適者とは營養空間の不足を来り起さよとすの増殖力をもちたものことではなくて、寧ろかようを限度にはは逃がく進みたいところの増殖力を維持してゐて、その為めに個体の充分な発達が出来ないことを、實には凡ての種の全体にとつてとをり、そして保存と増殖との間の均衡が個々の種にとつても、種には凡ての種の全体にとつて永續的に維持せられたいものことといふのがカウツキーの所謂均衡論の根本主張であり、彼が自然界に於けるマルサスの命題に反対して力説するところの反提題に外ならぬ。

又は生物の住むべき表面の地質學的歴史には急激な変動期と長い安定期との交替があるが、その変動期には特に適應作用が行はれ、そして之によつて安定期にはその成果の遺傳作用が

働く。また其の歴史は一言にしていへば地表面の多様化の歴史であり、そして火山脈を  
発生させ地表面を極度に多様化させることによつて現在の哺乳動物繁生の条件を造り出  
した第三紀層時代は言はざる最後の変動期であり、地表面多様化の傾向はこゝにその峰に達  
し、未來は逆に單調化への傾向を辿るものとカウツキーは言へてゐるが、さういふ性質學  
的展望が人口問題の理解に何處まで関係があるかは疑はしむ。たゞ此の單調化過程が今日  
どのような緩慢な自然史的傾向としてよりも寧ろ人間の作為による急速かつ顯著なる手段  
として進行してゐること、人間の出現と共に自然の歴史の中に劃期的な性質の導入せられ  
たこと、いひかへれば自然の歴史に対する人間社會の歴史の特殊性を対照せしめることが  
カウツキーの讀書に説得しようとする本心であらうし。

### 三、人間社會に於ける増進過程の特性

生物的自然界の實情は以上の如く、こゝにマルサス主義の根據を求めよのは全く無意味  
であるが、人間社會は其獨特の發展法則をもつたものでなければならぬ。自然と社會と  
の異同を辨別するとは唯物史觀の根本命題の一つであらばかりでなく、特に人口問題の  
解明にとつて欠くべからざる第一の仕事をなすべし。人間社會の發生と共に初まら  
新しい要素は人間による技術的作爲の介入で、之より人間は自らの生存空間を自ら拡大し

年々自然の均衡を攪乱する働きの導入することになる。人間の発生は自然そのものより後  
 進する要素の導入を意味するわけである。自然を社会と区別してそれが恒常不変である度に  
 求むるものはさういふ意味でも間違つてゐる。とはいへ如何に革命的な技術的変革と雖も全  
 宇宙の広大さに較べてはその極小部分に過ぎない。にも拘らず此の極小部分の表  
 現もそれが人間社会即ち人間の共同生活形態の上に及ぼす影響は絶大で、さういふ意味で  
 こゝで自然を永遠と社会の本質を厂史的とする者へは然るべき理由をもつてゐるといへよう。

が技術の進歩が人間社会に及ぼす影響は極めて複雑である。それは労働の生産法を増大  
 させるけれども、必ずしも常に労働の需要を増大するわけではない。例へば技術の進歩は  
 農業に於ける剰余生産物を増大させて非農業人口の増大を可能にもするが、併し又單に農  
 業労働の負擔を軽減するに止まる場合もある。その結果の如何は社会経済形態と密接な関  
 聯に立つてゐるわけである。要之、技術の進歩といふ新しい要素の介入によつて人間社会のハ  
 ンカは極めく不規則な、変転極りなき發展の途を辿るものであること、そしてマルサ  
 スといふ農業生産の算術級数的増大などといふことは全く意味のない架空の抽象であること  
 とを強調するがウツキキーの眞意といへよう。厂史上も人間社会の生活空間は数世紀の

（五）ハカと想像してよく、この人口増加も亦人間發生

は、時には局部的な過剩人口状態の發生の原始的事實を象徵する事件と、つゞき、  
である。といふのは嘗ての猿人たちは分の諸條件の成熟につれて地球上諸方に多元的發生  
をみだすものといつてよく、従つて又その増殖力は自然的均衡を常則とし、その總數に於い  
て増減をさ一定數を維持する傾向をもつておたものと考へられるからで、人間への近代と  
天に人口増加の事實も亦はじまり、所謂人口問題も亦こゝに初まることになりわけてある。  
とはいへば原始人の増殖速度はなほ極めて緩慢であつたとみてもよい。亦かたは、カウツ  
キーの強調するところによれば、決して食糧の不足のためではなく、寧ろその生活様式の  
變化に負ふべきもので、植物性食物をとつておた原始人から野獸狩りの原始へ出たとき、  
の不潔の繁茂と欠乏とがその増殖力を低下させ、そして屢々人口絶滅の危機にさへ立ち到  
らしめたと想像される。かゝる推定は傍証としてカウツキーは狩獵民族に於ける性的冷淡  
さの事實を擧げておるが、この原始人の低増殖力の解明に際しカウツキーは特にカウツキー  
性労働の問題にあき、女性労働の過重がその妊孕力を著しく低下させたと推定をいふことと互  
現存の野獸人の資料等より推論してある。即ち或る報告によれば野獸人の女は二十五位  
で老境に入り三十五までは既に妊孕力をもちない。且つその短い妊孕期間でも子供に適當

1015  
な食物の不足のため授乳期が長く三、四年は続いておる。一層その妊孕力を衰弱化してある

といふ。右に加へて更に愛人に於ける近親交配の畢竟がその増殖力に破壊的影響を與へたであらうことは動物實驗によつても充分に推知し得るところである。且つこの弊害は男女分業の成立が社會的の熟極化傾向を伴ふにより更に助長せられたとみてよく、且つこの傾向に女性の労働役割の増大に伴ふ母權社會の生成と共に念々甚しかつたと思像せられる。

かゝる弊害の種族的終點が特定の社會的制限を伴ふ婚姻習俗へと發展してゐたものであることは周知のことであるが、この婚姻習俗も人倫的感覺によつて受け入れられ、又かゝる人倫的感覺を介して貫徹せられたところの社會的實踐の外を以て、その時以來今日に致るまで性關係が人倫道德の、従つてまた非道德の中心的領域を形成してをり、且つ又人口増殖の世界にとつても一ケの強力を作用として働いてゐるものであることをカウツキーは特に強調してゐる。それは増殖力を社會的利害に順應させよための最も適切かつ有力なる力ではあるが、併しまた社會的利害の變化にも拘りず直ちに之に適應することを欲しなむ保守的の持續性をもつてをり、そして人口増加に際して姑息的に、時には又速進的に作用することになる。マルサスの人口教義が人口増加を忌避して小農民階級の性道德を理論化するものであることは後段再説する如くであるが、それはともかく原始社會に於て

る性道德の成止は寧ろ人口をその破滅から救ふための社會的要請をしく必要であつた、とをいふのは特に強調せねばならぬ。

人間社會の生活空間は原始自然人の狩獵生活から牧畜時代に入るに及んで更に劃時代的を發展を上げ、そして人口増殖力の上にも同様の劃時代的の転機が認められる。特に婦人勞働の増減と營養資源の規則的恒常化、特に又牛乳による授乳期間の短縮等一聯の好條件は遊牧的畜牛尙齊時代に初より農耕的定住生活に到る時代の人口増殖力を劃時代的に増大せしめたと想像される。鉄の使用は農耕勞働を専らに仕事に転化し農耕的定住生活の開始は剰余生産の可能性を著し家族奴隷の發生をもたせしに到つた。かゝる生活様式下の高は妊孕力を傍證する實例としてカウツキトは南アフリカに於けるカマル族及ブール族を、高は産卵的設備にあらす、テントト族に對比して極めて對照的な高妊孕力を示してゐるといふ十七世紀末バロウの報告を引用してゐる。またベトナムが引用してゐる加奈佐のマニエス人も同様の經濟生活段階にあるもので、その子使数は平均八乃至十六人を數へ、時には二十五人も多き者も見られるといふ。ミカ多産が民族的特性に歸するからざるものであるといふフランス本國を思へば充分であらう。その他、民族の移動期を以て前よりその大體

No. 17 初期にかけてのゲルマン民族や、イスラム教發生後百年間の西はスペインから東は印度へ

まて擴がうたアタビア人など皆その社會經濟的要素をひとしくすまむるべきこととすカ  
ウツキーは強調してゐる。

農科生活とその技術的發展が在りて代を逐して生活空間を善しく擴大し去ること大いにて  
は繰説するまでもない。カウツキーに引用されてゐるスウェーデンの一方新當り人口收容力の推  
定数字を掲げてみるに左り如くで、農科經濟による人口收容力の跡を警覺すべきは足らう。

北支那貧瘠地帯の狩獵種族及漁務種族 ..... 二乃至五人

ステツプ地帯の狩獵種族(ペンシマン及オホトラウマン等) ..... 二乃至九人

若干の農科を伴ふ狩獵種族(インディア及びグアテマ族等) ..... 一六〇乃至七〇〇人

北米の漁務種族及ポリネシア族 ..... 七〇乃至一七〇人

遊牧種族 ..... 一七〇人

内部アフリカ及南東アジアに於ける若干の手工業を伴ふ農科種族

..... 一七〇乃至五三〇人

ギリस्त世紀以前の北方インドゲルマン農科種族及ガ牧牛種族

..... 五〇〇乃至一三〇〇人

熱帯地方に於ける農科を伴ふ半遊牧種族 ..... 三四〇乃至八九〇人

熱帯地方に於ける農耕を伴ふ漁務種族 ..... 八九〇〇人  
 欧羅巴の氣象條件不利なる地帯に於ける農耕 ..... 八九〇〇人  
 三農圃制をもつる中南政諸國にして都市發生の初期にあり適當なる森林資源をもつ場合

例へば紀元前四世紀のギリシヤ、第一三、四、五世紀の中政等

一六〇〇乃至二八五〇年時代の中欧の農耕地帯 ..... 二六〇〇乃至三五〇〇人  
 南政の純農耕地帯 ..... 一七〇、〇〇〇人

現今の印度、ジャワ、支那の優良農耕地帯 ..... 一七七、〇〇〇人

農耕經濟による生活空間の拡大は特にそれが都市的工業者と相互扶助關係に立つ場合一層顯著であるが、併しそのようなる其關係はカウツキーによれば單なる夢想的幻想であら

つて、史上の事實は農民の福祉がその非武装化と相伴ひ、その結果が農民自身の頽廢への過程へ、ハハムへれば搾取的貴族制度の發生への途を造り得た。その形態

は或は農民が近隣未開種族によつて奴隷化される場合もあり、侵入種族に征服されるに至る場合もあり、また農民自身が階級分化して自ら武装化する場合もある。乃至は都市

の発達に伴つて之に採取される場合もあるが、就中以もその生活差願の拡大は同時に牧  
 奪と隷屬の拡大の尸史であつたといへる。農氏にとつての最善の形態はその支配者が地本  
 的豪農として余剰生産物を自ら消費してゐた程度の時代で、支配者的積累を狩獵権や河夜  
 の権利ぐらゐに上まつておた間である。がそれら支配者が都市の生産物への欲求をもつて  
 くるようになるると直ぐに事情が變つてくる。そして牧奪の進行は農業技術の進歩を停止し、  
 飢饉等の頻発と相俟つて生活空間拡大過程にとつては戦争以上、新しい姑息要素となり、  
 そ水が時には全く破滅にさへ到りざるを得なかつたことは口くするの裏事の不可避りである。  
 そしてかくる破局的狀況からの飛躍は口くする場合のみならず他民族の侵入によるか、  
 乃至は近代フランスに見るやうに自らの革命によつて之を行はざるを得ぬ。要之、生活空  
 間の拡大過程は極めて複雑で、農業生産の算術級的増入をいふことは何處をさし  
 ても見當らぬといふのがカウツキーの文的考証の示さうとするところである。

右の如き階級社會の發生が人口増加に対して如何なる影響を及ぼしたかをいふと、その  
 初期に狩獵時代と異なる支配者階級のカガ戦争の負擔を引受けたといふやうな事情が人  
 口増加に好都合であつたやうな場合を例外として、惣じては階級的支配下の小農家族の經營  
 力を減退傾向へ導いたと考へらるゝ。特に典型的な場合は奴隷經濟下の人口減退で、奴

隷の懐妊がその主人にとつて労働力の竊盜と考へられておたことは周知のことである。

従つて奴隷經濟は不断の奴隷略奪の下にのみ可能であり、奴隷略奪は人口余剰をもつ農民的經濟の存在を前提としておたわけである。が階級的收奪下の農業過剰人口はそのほけ口を農民の移住が都市流入に求めたが、更にその自己統制の爲に取入れられ手段なき私有財産制度を背景とする避妊を人工流産として、マルサス主義の採用し強敵するところの道徳、所有階級のみ結婚すべしといふその道徳なきかゝる発展段階に於ける農民道徳に外なりぬこととマルサスは特に力説してゐる。いひかへればマルサス主義はかゝる段階の農民經濟に伴ふ技術的、知能的、並に道徳的の狭隘性をば自然法則にまで聖化するもの以外ならぬとウツキーはいふ。

No 21  
都市手工業の發達は農業生産性を増大させ民が併し收奪の強化と共に却つて農業の技術的進歩は破滅的を停滞を續けたことは十八世紀のフランス農民に見るところで、フランス革命の因由するところも亦そこにあつたわけである。他方この時代の都市の手工業者は古も農民の性道徳を受け入れられたりはいふ迄もない。たゞこの時代の都市に人工的な産見制限がなかつたのは当時の都市の殺人的な高死亡率のためで、その結果都市が農村からの不斷の人口流入を必要としておたことは周知のことである。人口の幾何級数的増加をば思ひも

よりぬ。数世紀の永きに亘つて人口は所謂封建的停滞をいつた。生産技術の進歩がなかつたのである。封建的な階級的收奪が生活空間の拡大を許さなかつたのである。

### 近代資本主義社会に於ける人口問題

近代産業革命と前後表裏する政治革命とが導来した近代世界に於ける生活空間の劃時代を拡大し史上未曾有の人口増加とに付いては詳しく語るにも及ぶまい。我々の住んでゐる現在の事件であり、カウツキも特別の紙幅をさつてはみない。近代資本主義社会に於ける人口問題の集約点であり又問題解明への鍵でもある近代の差別出生率の問題についてカウツキが叙上の如き史的展望下に觀察するところをみると次の如くである。

即ち資本家階級の寡産とプロレタリア階級の多産との差を恐れる経済的理由と並に、この階級の女子の生理的弱体化に帰してを、別に所見の新奇なところもないが又異論も言ふことであらう。人口の壓倒的部分を占めるプロレタリア階級についてはカウツキは資本家的收奪下の過勞が特に女性の家庭外労働といふ人類史上劃時代な現象を媒介として当然に妊孕力減退の傾向を伴はざるを得ない筈であらうといふ。それは嘗て原始狩獵種族の場合に見られたと同一の傾向であるべきで、天の環境の相違は例へば乳児用ミルクの大量生産といふような一事例にも述べられるけれども、理論的にはさう断定せざるを得

めといふ。しかも事実そのような傾向が看取され難いのは、ケウツキーによれば、第一にはなほ世代が若いことで、プロレタリア階級の日常生活上の劣悪なる諸條件も未だ早期老耗化を結果するほどの事情に立ち到つておなひのりである。また第二には不況に農村からの健全なる血液の補給があることも注意されてより、資本主義経済の存続はこの人的補給の可能性とその運命を共にしておるとさへケウツキーはいつておる。その他、当面の事情としては、プロレタリア階級に財産に対する顧慮のないこと、乃至は子女養育に特別な心配の不要ななどがあり、結局プロレタリア階級多産の現象を生んでおるのだといふ。

また最近の文明諸國に於ける出産減退傾向についてはケウツキーはそれが帝制ローマ時代と同じく野蠻人の高出産力り脅威として感ぜられておることを、この傾向を「<sup>3</sup>」と文化しその結果であるとして説く逆説が避制人口は弱さの結果なりとする新人口法則に帰着せざるを得ないブルジョワ的人口理論の逆説を指摘しておる。が之に対するケウツキー自身の説明は子供の増加によつて何れ利得ることよりよい大都市の生長、また婦人労働の増加、新しい避妊手段の發明と普及、その他特に大陸諸國に於ける國民的兵役義務の施行と特に之に隣伴する近衛隊の發達等の諸事實を擧げておるだけである。人類の延命力の歴史は婦人労働の歴史であるといふ新史から特に婦人労働の問題に力点をあいて説いておる以前には社會主義

的人口理論からする分析とし、特に論議するべきものなるが如うである。

資本主義下の人口問題の社會主義的見地よりする分析として特に討論されるべきものは、その生活空間の歴史社會的制約即ち農業の資本主義的拘束に関する問題である。いひかへれば現在の農業が實際の技術的進歩に相應してゐず、さういふ意味でその實際上の進歩にも拘らず自然科学と技術の状況に相對的には寧ろ後退的傾向を述べてゐり、且つこの愈々増大する後退性の因つて来る理由が農業自体の本性にありのではなく、寧ろ土地私有と賃労働の中心にあり、そのことをカウツキ―は微細に逐つて論じてゐる。がその論旨は社會主義の一般經濟論として商知のもので、特にこの再録するの必要もあらう。要之、土地私有は地代として農業技術の進歩を妨げてゐる。これは本作に對しては直接に地代として超過利潤を収奪して之を浪費乃至非農業部面へ特用して予ひ超過利潤を求め、努力即ち技術改善の努力を芽生へさせない。また自作農業の場合に於いては土地の私有は所有關係の交替に際し資本化された地代としてその購買價格を不当に高くするのみならず、多くの場合には抵当利子の形で之を高利貸又は銀行に支拂はせよことをなす。農産物價格の騰貴さへ農民に有利するものは當座限りで、土地所有者の交替と共にそれは直ちにその反対物に転化せざるを得ぬ。而かも土地所有關係の不斷の交替は資本主義下の農業の常態をなしてゐる。

その他土地私有が技術の進歩に伴ふ經營規模拡大への障害となることは周知のことである。同様に資本主義的賃労働は嘗ては農業労働の根本形式であつた協同労働を全く解消し去り、之を賃労働者を使用する大經營と家族労働による零細經營の二つの形態に替へて了つた。ガブルゾフ經濟學の愛玩物である小農經營は労働が脅迫觀念によつて勤勉を習性づけるだけであり、大經營に於ける技術的進歩の採用は労働を節約すためではなく唯々それが利潤を齎す場合に限りてある。現在カ支配階級は都市に於けるプロレタリアに對する反打勢力として農民と土地所有者との保護政策をとつてゐるが、かゝる土地所有の經濟的促進はカウツキーによれば結局に於いて農業の技術的進歩を沮むに外の何モウでもない。

六、將來社會主義社會に於ける人口問題

農業の資本主義的制傳を説くことは將來の社會主義的社會に於けるその解放を期待することであり、そこに於ける生活空間の劃時代的なる拡大を豫料することである。且つ又勝利せるプロレタリア大衆にとつて當然の福祉向上の要求は是非ともこのことと不可欠の條件とせぬはなりぬ。カウツキーは、資本主義は十九世紀中に特に工業と交通との劃時代なる革新を遂行し、社會主義は望むべくは廿世紀の大部分を特に農業の劃時代的革新作業に従事するであらうと。カウツキーが當時の統計的資料を基準として髣髴させてゐる

極大の農業生産拡充の可能性をその数字について検証するには及ばない。要之、欧露、  
 南北アメリカ、濠洲、印度等現在の大農地帯の單位面積當り生産力は今日最も技術的  
 に進歩せる英露のそれと違かに及ばず、また大規模な干拓排水工事によつて開拓せらるべ  
 き土地は北米合衆國だけでも、千餘億エーカー、同國の既耕の小麥産地面積の約二  
 十倍に當る。最も手近かなる内包的並に外延的の生産拡充に加へて、更にアラビア、アフ  
 リカ等の大開墾事業が残つてをり、社會主義体制下に於ける此の農業革命の世界的規模に  
 於ける完成には優に百年以上の年月を要するであろうとカウツキーはハフてゐる。そして、  
 この期間、社會主義下の生活空間は加速化されるであろう社會主義下の人口増加速度に対  
 してさへ更に遙かに大きな加速度的増大傾向を逃さざるうし、かゝる生活空間の拡充は  
 今後恐らく五百年間は社會主義に過剩人口の問題を配慮する必要を感ぜしめなかに相違な  
 い。そして五百年後には或は起るかも知れない問題について論議することは實際的興味もな  
 ければ又學問的に正鵠を期し難いと彼はいふ。

とはいへカウツキーはこの問題への解答を回避してゐるわけではない。社會主義下の人  
 口の推移をその凡ゆる可能性に反つて考察してみることとは決して無駄ではなく、特に社  
 會主義の意圖する遠大なる目標を明確にするためにも必要である。それこそ社會主義下百年

間の生活空間拡大過程は人口増加より速かに急速である」と推論される筈ではあるが、この事實は決して人間はその自己保存に必要なものよりも更に多量を生産するものだと、かような自然法則の結果ではなく、また科学と技術の無限の進歩の結果でもない。その主因をひとへに社會的諸條件の變化に負かものであるが故に、従つて又この拡大過程の停止または緩漫化の時代は来らざるを得ぬ。例へば電流の導入その他あらゆる方策を以つてする土地生産性の増大も最後には超可からざる限界にやまざる。それ以後の技術的進歩は土地の生産を高めるよりも寧ろ専ら労働の生産性を高めるために作用し、人々により多くの閑暇と自由とを與へるこゝたにならざり得ず、それこそ又社會主義の最後の目的をなすべからぬ。それだけ人口増加は社會主義的理想への脅威とならざるを得ない。そのミソカウツキーは社會主義下の人口は果してその社會主義的環境によつて如何に規制せられ如何なる推移を辿るであらうかの推論を試みるのである。

社會主義の實現と共に人口はその増加速度を増大するであらうといふことは極めて當然性が強い。貧困の追放と福祉の大众的普及とが死亡率を著しく低下さすであらうことは今日の差別死亡率からも充分に推定せられる。それに今日は商人、工場主等の富裕階級者への生存競争のために神経を消磨してをり、特にその労働時間が一日中に互に生活の享樂を奪り奪の競争としてぬる非健康的な状況に於いては彼等の死亡率も猶ほ低下の余地はあ

ることになる。労働時間を短縮し夜の享樂の代りに晝間の野外スポーツを置かへるであらう。社會主義社會は労働と享樂とのより健康なる諸條件を造り出すわけだ、それは死亡率を低下させるばかりでなく、妊孕力をも向上させるに相違ない。福祉と文化の向上は妊孕力を低下させるといふ福祉説的理論には、一部の社會主義者も賛成してゐるが、カウツキーは断乎として反対してゐる。蓋し富む階級婦人の不妊傾向はその無活動と栄養過剩、殊に夜の享樂生活の爲めで、反之プロレタリア婦人の高出産率はその早婚と自由な婚姻關係の結果であるからで、且つこのプロレタリア的早婚と自由婚姻とは經濟的配慮の缺いとに基くと考へられ以上、今日のプロレタリア婦人の高出産率は社會主義社會に於ては当然一般化するべき等のものである。殊に早婚と自由なる婚姻關係は會澤制度を廢絶し、性病を根絶して、子妊者の減少を結果するとは、必至であるとして、カウツキーは來べき社會主義下の人口増殖力を當てローマ人から「バーダナゲンラム」とよばれた民族大移動期のゲルマン人以上となるであらうといつてゐる。

併し又、カウツキーによれば、社會主義下の人口には右と反対にその増加に逆作用し乃至は之を規制する力として働く新し、可能なも亦生まれる。それは上掲農業革命と並んで社會主義社會の實現すべき第二の大きな仕事である婦人の解放だ、女性をその家庭的雜務の

ら解放し、その知的能力の向上を喚起し、そして種々の高度の精神的活動に參與せしめ  
ることから人口増殖力を規制する最も大きな力となることはいふのである。こゝでもカウツキー  
は再びスペンサーの理論をその傍証としておるが、併しスペンサー自身が引用しておる資  
例にフイテは特に社會主義的觀点からの疑義を表明しておる。即ち今日教育程度の高き女  
子に低妊孕力の事實のみられるのは精神的勞働そのものの直接の結果ではなくて現在の學  
校教育制度の非健康的な諸條件、例へば自体的運動を伴はぬ教室内での長時間の勉強など  
工場勞働に似た悪環境に由來するもので純粹な生理學的因果關係をなすものではないこと  
を注意しておる。殊にまた避妊法の實行により實際の生理學的事實の檢証は更下一層困難  
であることも指摘されておる。とほへカウツキーは精神勞働の強化による妊孕力の生理  
的低下を断乎として主張するつもりもなく、その點論旨は多少曖昧の譏りを免れぬ。察す  
るところに社會主義社會に於ける自然的妊孕力の増大を信ずるの如何處までも其の本心であ  
ることはいつてよく、之に反対する規制力としてカウツキーが特に婦人解放とその諸結果に期  
得するところには寧ろ倫理的感覺の異常を強化せよといへよう。

倫理的感覺が性關係と不可分の關係をもつておることには上掲文の展望に於いても關説さ

れたいところであるが、確かに原始社會以來結婚や出産が完全な私的自由的に放置せられ、

とはなく、その社会的要請が強度の倫理観として現れしめらるゝとはハム迄も存ハ、  
 ヲカウツキーによると、資本主義社會は、この倫理的感觸を特に性的事象にツハテ極端に鈍  
 磨して了つた。蓋し資本主義社會は、今レゾウの經濟と、その法制並に習俗を基礎とし生まれ、  
 その法律及び道德觀を採用したもので、私有財産制度と結婚觀とはその雙壁をなすもので  
 あるが、資本主義の發展による條件の變化はそれらに思慮から吾情へ転化させてしまつた  
 からで、小市民的社會の中でミスマルサスの教説も教育的意義があるが、天象的無産化過  
 程の進行する高度資本主義社會ではそれは全く意味のないものとなる。しかも資本主義は  
 一より不同化のハハも諸制縛を自ら完全に放棄するゝともいふ存ハ。その結果は資本主義下  
 の道德に二元乘離的の傾向を與へ、階級分化の尖鋭化は益々ハハしく、甚しくする。即ち人  
 倫道德の普遍冷當的の自明性を益々薄弱化せざるを得ないものである。社會主義社會の實現は、  
 カウツキーによれば、新しい普遍的道德觀によつてミの矛盾を解決し、それと共に倫理的  
 感觸そのものの異常を強化を實現するゝとでなければならぬ。婚姻に法的合法則性の有無  
 は最早問題となりなくするが、併し子孫の幸福の爲への配慮は却つてハハしく、純粹に表は  
 れるに相違ない。そして嘗ては非合法的結婚へ及ぼした其の感情は社會主義社會では人口  
 増加を規制する力としてより純粹に作用することになるとカウツキーはハハハハ。カウツキー

の考へるゝの規制力とは單に過剰人口の防止をのみ意味するものではない。出産減退の爲に人口衰セケル危険が感ぜられ、はそのような社會的要請に即應して個々人の自發的倫理感の下に出産を増加させることにもなる其の働きをいふわけである。反之、もし過剰人口の犯憂があれは、（これは又これに順應するところの力でも行われらるゝ） として閉鎖を自由とへの要求は社會主義的社會に於てこそ愈々強

化されればな、故に、過剰人口への蓋然性はそれだけ又強化されるわけであるが、その際その人口増加の抑制は、今日非プロレタリア的階級に於いて凡その少女に對し彼女が充分なる収入を持つた男性を合法的な夫として見出すことに成功するまでの間強要されることとなる。處女性の義務が遂行してあるよりは遂かか容易にかつ苦痛なしに實行されることにならざらうとカウツキーはいつてゐる。しかもカウツキーによれば、恰も社會主義下の生活空間の拡大が現在の技術的進歩を基準として充分に推論し得たように、この倫理的な人口抑制も亦すでに今日知られてゐる諸要素を手段として充分に解決されることとなる問題に外ならぬ。こゝにカウツキーの謂ふ既知の條件なるものが今日同知の避妊技術や優生學的知識をいふものであることはいふまでもない。

特に社會主義的社會に於ける優生學的配應に對してカウツキーが特別の関心を示してゐるのは、この當來社會に於ける人口規制の根本なる人倫道德の力に求められ立場からも極めて當

然りとて、階級的利害の夾雑物から解放され、全社會の革命的學識に相應すべき新しい結婚觀が子孫への配慮を愈々強化するばかりでない。とりわけ社會主義社會は病弱を養育する者の保護に全力を期すことを使命とするが故に優生學的配慮の必要も亦いよ／＼増大するといへる。が優生學的配慮よりする避妊や断種は、犯罪者や精神病者の場合を除いては、一般には飽くまで個々人の自發的を倫理的良心から實行せらるべきものであり、又さういふ理想は唯々社會主義的社會に於いてのみその實現を期待するものとが出来るといふのがカウツキーの主張である。蓋し今日の上層階級に觀りしる避妊行為は全く經濟的考慮から出發するもので、優生學的配慮、況んや社會的責任感に基く罪の意識の如きは毛頭認め難い。下層階級に於いては一層さうである。そもそも下層階級として劣悪な生活環境の中に生活してゆくの、如何して子供の悪質の原因を又遺傳的事實にまで反省する余裕があるであらうか。社會主義的社會に於いてこそ初めて悪質の子孫の發生は両親の個人的責任として考慮せられ得る外的諸條件は與人りれるのだといふのがカウツキーの特に當來社會に於ける優生學的配慮に期待する理由である。

マルクス主義社會主義の人口論は、自然主義的なマルサスの人口論に対する反対主張として、人口現象に対する社會經濟的要因を<sup>強調し</sup>主題化するとこから出發した。マルクスによる資本主義的過剰人口の構造的分析はより先鞭をなすものであるが、それは經濟が完全に人口を規制し、労働の需要が人間の再生産を恰も商品生産の如くに決定することとを説いたものではない。ゾムバルトの所謂「經濟主義的人口理論」は必ずしもマルクス主義社會主義の人口理論を特化づけるものではない。人口法則の歴史社會的特性を主張したマルクス人口論の基本命題は更に廣泛多岐なる史的唯物論的展望を要求したものであつた筈で、以下に紹介したカウツキの論策は即ちこの要望に一應の解答を與へたものといへようと思ふ。

従つて所謂「經濟主義的」臭味を離脱せる處に於いては本論策は最も典型的なる文献といつてよく、人口増殖過程に於ける生理學的要因の独立性を無視せざる處に於いては社會主義的人口論中特に異色あるものともいへよう。人間の自然的な妊孕力は特定の社會的要素に順應するものと考へるものは自然科學の全經驗を否定し最も愚い意味での目的論を驅るものと考へるものは一ツキーは宣言してゐる。だからこそ確かに人口問題は人間社會の丁...

史と不可分な永遠の課題として立ち現はれるのである。とはいへカウツキーはマルサスの如く過剰増殖傾向を全生物界の自然法則とすることに断乎として反対する。カウツキーによれば事實は寧ろ正反対で、均衡こそ自然の原則的傾向でなければならぬ。凡そそれは人間が歴史的に干渉する以前の自然に於いてであつて、人間の出現と共に逆にこの自然的均衡の不断の攪乱も亦はじまる。人間の技術的作爲がかゝる攪乱の不断の繼續を不可避とするわけに、人間の自然的妊孕力も亦自然の均衡を衰へ、人口増殖力の不断の過不足こそが人間社會の常態的傾向となる。

人間の技術的作爲が外的自然に對して導入する攪乱作用は常に人間の利害を中心として特定の生物種を絶滅しようとし乃至は他の生物種の過大増殖を幫助しようとするところにある。取捨はありであるが、かゝる干渉作爲は自然的均衡を喪失してつひに人間の自然増殖力を規制するために行使するとはできぬ。その代りに出現せる新しいカゝる人倫的道德性に外ならぬわけに、カウツキーが人口規制力としての人倫的道德性を重視する處は人口増殖力に於ける生理學的要因の独立性を無視しなはんと、表裏相呼應するものといへよう。秘して倫理的意識は自然に對する一定の距離に於いて自然との對立的矛盾の自覺の上に成立するものである。

が倫理の強調は必ずしも空疎な觀念論的倫理主義ではない。カウツキーは確固たる史的唯物論の見地に立つてより、従つてまた謂ふところの倫理的道德性ももつては自然法的な過入増殖傾向を永遠の対敵關係に立つてゐるものではない。既に原始社會ではそれは既に近視交配による種の絶滅の危険を防止し人口増殖力を健康化し強化するためにも必要なるものであつた。又、技術の一層の進歩と共に過剩人口傾向は必然化し、出産制限の必要も亦生じて来たわけであるが、特に社會階級の分化とその対立が深刻化すると共に倫理性も亦階級的葛藤を余儀なくせられ、そして遂には倫理性そのものの退化と弱体化とをさへ結果せざるを得なくなつた。さうような史的発展の上からカウツキーは階級社會の廢絶性の社會良義的社會に於ける倫理的道德性にも異常なる強化と人口現象に対する唯一最善の規制者たるカとを期待するのである。

No. 35  
要之、カウツキーの人口理論は人間社會に於ける自然的妊孕力と生活空間拡大過程の原始的衆離不相應の傾向を力説する共に於ては極めて現實主義的かつ悲觀主義的であるが、併し將來社會に於ける人倫的道德性の強化とさう人口規制力としての万全を推論する共に於ては極めて理想主義的を以て樂觀主義的であるといへよう。が、この永い階級社會的葛藤の後に完全せられる人間社會に特有な人倫的道德性は自然生物界を貫く原則的なる

均衡化的傾向を眞の人間の自覺を媒介として再現し完成するものであるといふ意味では  
 其の全理論を敵の思想的傾向は敵の理想主義的であり、また樂觀主義であるといふま  
 じ。いふかへは其の樂觀主義は深刻な歴史的现实意識と媒介としながら歴史の発展の  
 必然的傾向を據りどころとする。ところの樂觀主義であり、自然主義が人間の善意と努力  
 とに対する悪魔的な敵対関係をしか見ない「自然」自体の中に人間の作爲を媒介として實  
 現せらるべき永遠の課題を洞見しようとする<sup>史主</sup>善的精神をその世界觀的背景とするところの  
 樂觀主義といふまじ。そういふ意味がこゝに於て之を社會主義的人口理論の一應の体系  
 的勞作として推挽するに値するものといへようかと思ふ。

本多枝吉